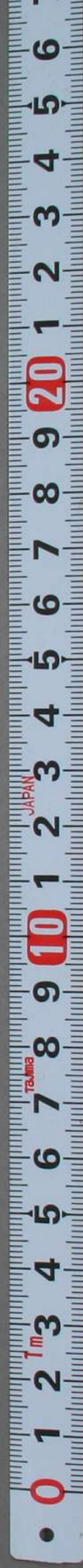




韃
靼
勝
敗
記

五

特
13
2175
5 止



きつと合あつるは親子の縁の切らるや僅うふ細く服と
用き曲なる智うてまじり「時款の墨児葉えり」と只
一智と危あつて離海野のる傷の露と滴より單殺得
くん ちと墨児葉えりをくちド区付て只一付とけ
おとを及者の用章に留て血透ひあへし若旦那歌い起
きりてより時刻後り止の園表の事うまひ何世とあふ
あつやはく親旦那の心死骸を葬りそと母君も若旦那
とるよあやもまかじと油の言葉も涙と押へ父の死骸
と肩おろけ弟克とさうて立ゆの火早えんが妻の死骸
まき音儀いうと移居よりいづ交のありさぬるより

そつと計りよあ火一「男の執入はさくもあは編りて
息絶より單殺得くんとまけお新をわく身を向へ已
墨児葉えり「恨令何ふはせり共父の歌き母の仇は
と男の討あく父母の灵魂よは向けをる悲と暗
おと踊りよりく「親まのてくまより片より怒るるを
存る下僕もあつて先はあ母の死骸と所送り
区殺は若あつてもなく「一回の日もまされば主君は
喇麻らまふ父の横死母の殉死と白地ふ若復讐のお
に我がの胸を刺ひされば喇麻ももそ志をたね夜を
たれば怒り傳へて胸をありりそ尾よく仇と討くさへ

吹り来る一とあるれば是を謝して是らよ本國を立出
たり又善見業の火草を嘗て討つて滅し利され
ども十分の海峽を其の西に船の幸あるまじと
暗は八十里程延てつくと思ふと此の事
に告げありと秘傳するに諸國の軍勢傳候のおるれ
は勇士を擧げ用ひらるるも其の海峽を嘗て
の西に船の幸あるまじと思ふと此の事
求めん然ある時は是を嘗て討つて滅し利され
独り此の事日教と候て嘗て嘗て嘗て嘗て
めを隣の人と築め日く武藝の廣言せしに候る

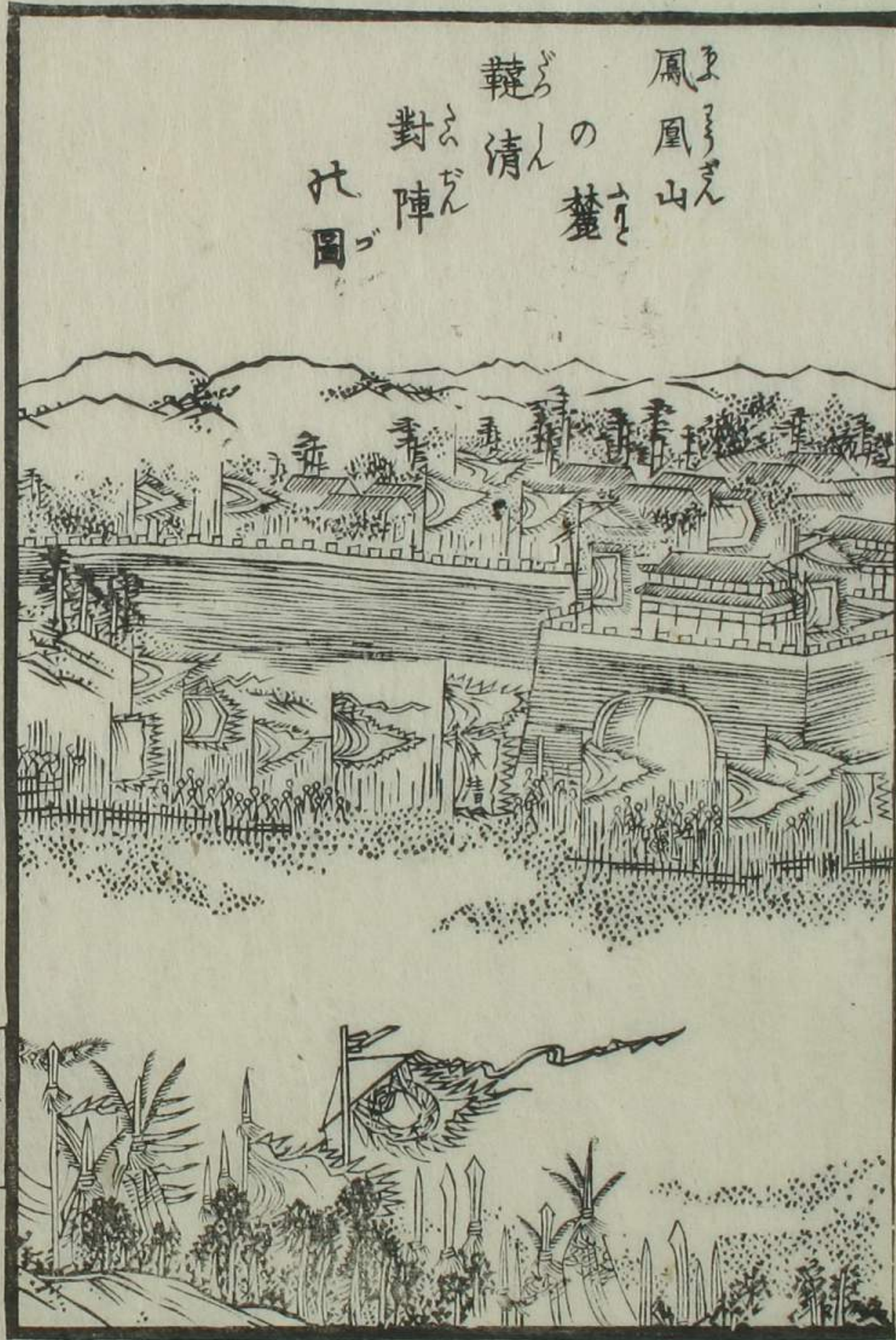
城主の上つ又是に一とあるれば是を嘗て
とて使と心と城中に居る善見業の火草を嘗て
雨をまが一強も及ぶに城中に居る善見業の火草を嘗て
雀彦輝の柴板とありて是の事
を汝武藝小長とありて是の事
系何屋の産物を名を何とありて是の事
るや洋小言とせよとありて是の事
支那雜報の内略備略の産物を名を何とありて是の事
初率より武藝と好む成長して嘗て嘗て嘗て嘗て
経歴し武藝力量と候るよ是れは是れは是れは是れは

藝古今と彫る小世礼きてて七右臣勇士ハ彫りて我
術藝力量人ハ務るとりつとも事うきよ功と彫るは子能
たは今中華に名礼起り北京より勇士と名あふの心風
取り思ふ事するは我倭備備と少京より里程の遠ら
きれども元來少系に属するの國をまけ修る朽果ん
よりいけはと去て中華に赴き少京帝に眼勅一武名と
て下れ彫りし名を後世小世さんよりわどと名いさむと
修くけ城下に来りしと己が懸子と押色と城一かう
進くまはは採るいそ志と威下再びるひるひ風替り
に種のをくと種歴一何ぞ珍くしき昔剛ありやと墨奥蘭

る善て中より我國の人くも強健して能るとに
長槍と使ふ事多し中より長て長槍と使ふは少と得たり
は長槍の柄の長さ二丈ありは二丈二尺ありは他り戰場に出
て敵に對するは利あり城攻に於ては味方とむる時この
槍と備ふは掛柄と修くは入式ハ敗軍に及ぶ
敵に迫るは陰念と修くは利ありは是共ハ緊要の兵
かろりと云ふまは採るは倍く威下そ旨是は言と
に及びしは並居の諸臣も其理不依と云ふは其
古槍と修りて武藝荒不都る者ハ威合と中より
軍用小立と修る者もは抱へ若者の者もは指南と云



鳳凰山
の
麓
の
陣
對
此
圖



多
寺
四

一由一由と墨見蘭の不言會あり日と約し
 て極右又極中なる武藝の名人十人と此
 け夜客囃客國の浪人由他小素り武勇の風評ありて
 なるかかしてありて梁を拾と使ふ軍陣子利
 阿の首と速るに因て日と約し試合と申すは
 梁と雄雄と愛し練軍用なる者なるは百能一人と
 なる首とめめと中後されいけし人ハ多し武と
 磨く勇士とまゝを及び彼浪人の安伏て入るの
 目と誇りんと拳と使めく約居たり既ふそ自に
 大廣るの座をよ試合の場と極上はよ極至豊軟

五五五

王 大友の座上小執柄崔彦輝 刑部 案板
 同曹知白 木と始めく諸臣お流お奉志
 左教と打バ廣屋の双方よりをいけのて武礼
 勢と無墨見葉の彼二丈竹の槍と日他は武
 実をひき密囃客人の強健なる人前は務は墨見蘭
 らんが強先何ぞ款をいけち十三人の勇士と突破り
 け時延と打バ双方より武礼して引く試合終て墨見
 蘭と清おにりきと下さる今より汝と抱へん
 右勅とて一府中の若者も槍の指南技をいけ
 後さき打負る十三人とも至と下さん必を恨と食

むのたうまをさるれば要見業の事十又洞ひみ
かぐ以受中て互さるるが不自して城門は於て一箇の
中野宅を賜り文より門人目くれば増し長くに青蓮し
寧古塔城中に威を振ひるる却復復讐言のみは喀爾
喀爾と云ふ一草殺得とんとも幸来ど十六歳るれども
仇と付く父母の灵魂よも向をるる怒と云ふせんと一心
と潔一或時北人の体よ出多奴と執小色とあるひの商
人のまねと云はれ所又依し山又禁て園くの城下の勿論人
家母さ山里と云ふりて是もけは寧古塔小来りけ府
よて呼とゆくれ先基と喀爾喀の浪人を抱へらまると

老檢を指南するの由より風評しこれは何を耳寄の事
有りを考て親と種くはんと碑けともをよるは後
もうて日と差る所はけは紐組より軍起り黒龍艾丹
のあ流と攻流一脱は寧古塔又素あるの此より城
中の騒動大方なるは小来への援兵と乞ひ又軍役の人
が町人百姓と携まり而くに役所と建て十五女より何
十女との者と云々の此後中しこれに是居業の抄ごと
被役所よりなりは公使の旨形ひこれに子孫許容
ありとく城門の人是小来入るる後より於て目く容子と
親へども要見業の事今の大身と有り官最よりうくひん

る多と得ざりに難難勢既不改を以て依る軍師のみ
ちく墨兒蘭のちも一子のおくしておれと終り歩殺と指
まむく不思強なるる軍師得るんと墨兒素らんが
も不属して歩殺と勤む方口は是と足まむ終る方口
又の仇ちまむ飛掛つて一討と勢りへどもまむ早く殺
いきてを奪と終りも仇と侍は重なるる無意の時日
とまむるるふと出て子三年の星雲と澄る十九交
ありりまむと難難小老難も交り果るれば墨兒素らん
と旧識人と墨ども女も心付るるに侵むるにあやみ
うりるるに或たりまむの圖と察囉囉王なるる軍師の

百廿七

麻練拔見ると共は備つて備方と切戻へ既よ小京乃
咽首と備む艾丹と改落一勢ひ傍く破巾の如く是
より寧古様と改んと軍強あるる法王囉囉喇嘛らま
席とをを吾と奉てより我も勢今も功を建てるるは
難くは寧古様の城改る素が一は小住せつる長と清の
まむれば察囉囉王なるるも是と承諾しそむの艾丹
小まむく是を切戻へ一交のぬくと梅育一且北系素古
の後法と防ぎるる囉囉喇嘛らまの我部下の烏斯坦
とんと軍師とてまむ勢七万餘騎と引率一日と澄て
寧古様のは方鳳凰山の麓をく押引陣と布てまむ

小お見と申し地理及び款の要害と繋りひつゝ寧古
 塔より軍勢多しと雖も要害の地ふあはれと昔一六
 軍師馬斯坦は再々自ら出で地理戰場の傍地と巡
 見一陣小ゆる唯唯喇嘛らるゝのおまきおまお見の
 者より海へとく寧古塔より軍勢多く昔も伏山
 に見ゆまとも要害の地ふあはれ唯唯方鳳凰山の支極
 登り山下に謀と見し大煩と海へ款をく然り一因
 打放し多あく西と討は唯唯方の換亡くして獲利銀ひ
 る一款又塔中にまき出でし唯唯にまきし假令要
 害完くぬ平塔といつゝも軍勢多し多れば士卒の換

多五八

亡多くして争あはれ深き一死して日と延まら小系
 援者後より暮り唯唯方よく雖もあはれ一若鳳凰山
 の支極と款とあはれ唯唯方と繋りて唯唯方の弱
 と一六の場あり軍の傍地一舉ふあり然し
 終く款と懐くせ置て平く鳳凰山の支極と繋りて
 お述まら唯唯喇嘛らるゝと始の皆く馬斯坦は唯唯
 索と威し多あく又因り寧古塔塔中へ書をまき
 文を白く

奉

我國属 貴國久而無別心 今帝乱政欽差諸大臣者

怠其職虐民暴惡增長而遠及我國下民不免餓死乎怨
今帝如報仇帝則齊殷紂王欽差大臣亦似秦趙高輩天
命有限太清已為滅因之天降生民討之而令救民之塗炭
生民則我也貴王等屬其幕下受天討者盲蹙之如向猛火
我焉不傷之哉早齷心來于我陣立降可全一命矣誓首

癸丑立復

嗟喇喇嘛

と諺め別勇猛者と携て半かきくけけにけり
書と後世の成業一書より勝僅二十騎をて馬は誇り寧
古塔塔へ廻る大の櫓より是とんく大は懐く歌僅
二十騎をりりて能ある大煩をて打殺し中とさる

女五ノ九

本丸へ侍へんべ執柄崔彦輝
二十騎をて南條へ張るも必し子細あらん子細も同
ど理不ふ打殺さの義勇をてと却て却て又りま
ん先づ櫓より事の由とる下知をまば中々の獲るを
用と形のまきと細と問ふ喇嘛らの使者きててさ
我ハ嗟喇喇嘛より南條へ一太中をて中へき使者中
て別と孫ともお系せり王のおよむまをて妻妾中とん
と呪りりる又け首崔彦輝へ侍ふ崔彦輝
背くと唯一何まも子細とるのて後ち奉りてけり
先本丸へ懸長と下知をまば塔門と開く案内を本丸

よの難親人の勇豪と挫げんと上服の豊親王
央の崔彦輝と崔彦輝の崔彦輝と崔彦輝と崔彦輝と
して故千の勇士大廣より極例の勇士と崔彦輝の如
くお結成威と崔彦輝の崔彦輝の使者崔彦輝の使者
の崔彦輝の崔彦輝の崔彦輝の崔彦輝の崔彦輝の崔彦輝
に合体して崔彦輝と崔彦輝と崔彦輝と崔彦輝と崔彦輝と
崔彦輝とも崔彦輝の崔彦輝の崔彦輝の崔彦輝の崔彦輝の
付んると崔彦輝の崔彦輝の崔彦輝の崔彦輝の崔彦輝の
と受取り用として崔彦輝の崔彦輝の崔彦輝の崔彦輝の
王將豊親王

五十五

忽ち氣きと愛ト小秋の寇賊累代の季忠と志と崔彦輝
款もろの志と愛ト小秋の寇賊累代の季忠と志と崔彦輝
と崔彦輝の志と愛ト小秋の寇賊累代の季忠と志と崔彦輝
不降の崔彦輝の志と愛ト小秋の寇賊累代の季忠と志と崔彦輝
合戦小只一擲と崔彦輝の志と愛ト小秋の寇賊累代の季忠と志と崔彦輝
居文と崔彦輝の志と愛ト小秋の寇賊累代の季忠と志と崔彦輝
たまわんと崔彦輝の志と愛ト小秋の寇賊累代の季忠と志と崔彦輝
と志と崔彦輝の志と愛ト小秋の寇賊累代の季忠と志と崔彦輝
言と崔彦輝の志と愛ト小秋の寇賊累代の季忠と志と崔彦輝
不悦の崔彦輝の志と愛ト小秋の寇賊累代の季忠と志と崔彦輝

け付異見業めも一匹のつてて雀彦輝さんが先陣小
属一卓殺得とんまもほひ来り平た小父母の仇業見
業めと付んと付忍へどもあもつるてくを奪いと能
りされが危やせん角やと目疾心を昔一むらおろ言主の
唯唯喇嘛らまけ陣小押あると受て内ん大は勢ひ居る
あゝあうぞりまけ陣小ほろも是天のちあるあかり
我け陣と彼と喇嘛らの陣小取りけ付と付へ加勢と
乞て業見業めと付ち終ぐけ陣小を巨衆さるた者の
二とと人まふるの功是より大なるはしとんと受し由
と見合せ切も二十枚とる一疋とを盗と陣とゆけ出ると

打乗一皮小喇嘛らの陣小強き一に疾の既又成の下刻と
夜とりの美人怪しと昔めく何者うろど疾中け陣小
顔小羽乳者と理不るに繩と掛く本陣小は是れを
引と海へまれば喇嘛ら自らちとを吹味さんと引出
うろよ何ぞ計せん三年あは秋と付は仇と存んと成と
情て玉と出する卓殺得とあまは胆強と止行り
汝玉と出する三年に及びりうろよ今夜我陣小身
中とあひらとまれば卓殺得はまは僅ぐはづ法主
の安泰を統一次で諸國遍歴のは身よりあはれ又来り
仇業見業めと付と出しと後方殺入也一五二十



乃ちあつたも三年より幸一の優曇花のさるる今宵の
 如くし教をせしと名を掛まはる見葉の如くを怖り推
 系より青二文とみるをの危きも及たは賊あり者共出
 合と大考の罵りつて枕元なる刃と九只一打と切符を
 こつていさ恨の表と双掛潜り又打合を一上一下火花
 と散り散り又早殺得とんまらる種く地へとも荒れ務
 まし一葉見葉らんが本事に敵いぐく女一落れとあり
 て既の危うく忍へるあは付添来りし五人の勇士横合が
 助ちのし一葉見葉らんが友右の統と打落をば死も釘費
 のごとくふかき働くとはれは勇士名早殺得とんまらるに

文五十五

糸して父母の仇ちりあるをせしと侍小丘とれゆを
 ハ早殺得とんまらるを智掛く父母の怒と物もい知まら
 の肩より右の肋へ切りまらると計り又例まらる刃小
 首打落をばおろしにあは陣くへ忍び入る二十隊の人々
 ねはより百挺の鉄炮と散り掛周とれりしは音は
 陣思ひよりさるるまらる上と下へと落るる振振とるあを
 手まらる割るる長槍と刃迫て突きく馳るる崖彦輝
 まが本陣より是とばけりし松明と照し救ひ来り味方
 と助まらる入替つとて死んともまらるる味方振振へて
 まらるるけり被斬るる敵はまらるる敵味方とるるは戦ふ

御もちりりる却後風風の陣より早殺得と
へり勢の喧嘩喇嘛らま軍師馬斯坦らんと計く夜討の
人数とせりきり夜をて馬斯坦ら喧嘩喇嘛ら不若く夜
を介の幸ありて夜討をとりつとも敵の更り敵のふき
と付て一旦の突崩とも味方小勢に頼りて敵勢を
へとまばま人もままゆりゆりまはまはまの夜討の
老軍とゆくと敵の用章の所と付て一時又寧古塔城と夜
くつ寝ひは」とゆりまはまはまとより」とま又老軍と下
知しと押出に脱して敵陣をく押参る時ハ子系を
をり敵陣と頼りに雀彦輝を本陣より救ひ参り

て後とまんとまらお柄ちまび時分ハよりけ途と分する
懸まくととを敵と打と下知をまび老軍一同は陣と依り
鉄炮と打掛を二五三小攻付まび敵を倍く作天一老軍と
敵て迎出を子夜も明後まび敵に雀彦輝をいん大敵
怒りまま味方の形勢るるま丸を成て敵と破き死を
ともまくるりゆきと血脈を成と下知とたを敵と押り
まをいきて是より敵を惜むまをいきてまをいきてまをいきて
丸はゆへ群る難勢の中へ突入と面も振む血戦しあぐん
乱軍の中に付死しとれば馬斯坦ら喧嘩喇嘛ら探配お振ひ産
み参りて敵と争ふと烈しく下知をまび勇とまら難

若者うるとは威下と貴し以て下さき馬おとせ賜り
 一万のおとせり若士と毒のおとせりおとせり賜り
 右と毒くとも向き又仇墨兎蘭の首の海をぬせり
 新汁へとて下さきならん早殺得ん早殺得ん早殺得ん
 威敵袖と後一危角の死受もや後ぞ辱く謝して我お
 びとさ死下の考実ある者と撰て出さし墨兎葉ら首
 とおを本必小差り父母の漬養よゆへしむ嗚呼者なる
 ちろるるる蓮の泥の中に生さく泥を深ぞ早殺得ん早殺得ん
 小狀強暴の中に生さくれども古賢人のまよるる忠孝
 共よ命ふせり比ひ希なる若者也

韃靼勝敗記 終

四十六

附添 ○ 韃靼勢天徳帝に味合伴の事
 噠喇喇麻らより寧古塔落城の部と急使とん艾丹
 に在陣の喀爾喀をうらうらの陣に若く續て韃靼勢
 古塔小未會し流中よ入くけ夜噠喇喇麻らみの早
 事らる大功と感稱し次小馬斯坦らその智謀と美義
 を亦早殺得ん早殺得ん早殺得ん早殺得ん早殺得ん
 物也一ちりて教くの引おと感状と居く賜りり余
 諸軍の軍功の陰謀より或ハ馬鞍武具珠墨絹布木
 とらへその正大妻と僅し上下教刃の軍勢と休め望日
 大廣回小諸將と集め軍の意見と向ふよおをまきてこの

勢ひ又案ト吉林遼東を以て内地不攻入天下統一統の功
と云一ゆくと衆は同音にお陽の財は麻練抜曳むら馬新垣
うその友人最も静言桑を抄く味方救月ううさうは勢必
中と平香まううの諸氏は大清の并改を悪そ士の君
の義者を責し付バ務ら後ハ清り弟本の風を靡く如
くに控ひ又ハは夜のごとき思ひる幸ひもてこそ釣の正
今内地より後明の天徳帝は民の心を得く智勇
の士教多是と補佐を且大清も亦儒代勇功の忠臣多
うと一たある財は何と付とも中く今迄の軍の事
変り一勢又ううの務利を案は「一夜敗る財は是との

念五十九

戦功水の泡とちり却と世のお笑いとあるべし先交より
南多へ使と絶天徳帝は一味合伴の書を送り
ハ彼らううは必諾し我軍の合伴せしと表し軍威倍々
盛中して北京を討ん事かせり大清あはけ程款を借ハ
らんぞけ方へ軍馬と出さの海あらんやその内君に仁政を
布き氏と極育し士卒を個條し長根矢玉を射へ振を
固くして財を打ち盡後明恢復の大事成就せは後
小陸の支那種継一糸と然し天命を安んじゆ二虎相
争と云ふ一虎ハ倒し一虎ハ傷く聲もあまは替く南北
戦闘の官子と云ひ海あらんやその内君に仁政を

と率て内地に攻入奉命を奉りて其支端を以て
 言舌流水の如く一息のよどみもなく速く
 主と始りて始りて始りて始りて始りて始りて
 けり又感嘆の聲を以て止りて即時に去りて
 細く路次城の中を以て入城の使者として
 便ちて其の終と終便を以て南帝を以て
 に至りて天徳帝の書と献る天徳帝の書と
 も前帝の書と存意の上承流の色紙と徳め
 うの敷の黄金と賜り別便を以て寧古塔へ
 韃靼勝敗記附録終

